

中外新聞

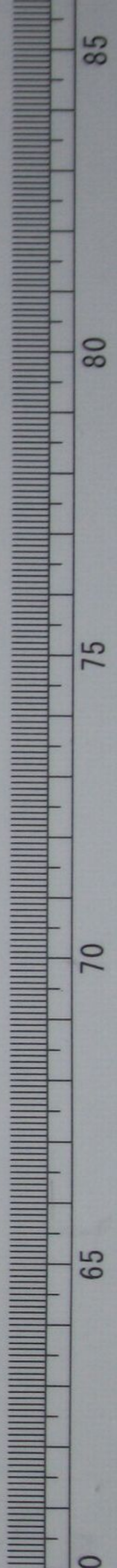
外篇

十五



定價一匁

西垣文庫
 文庫 10
 7328
 15



特 文庫10
7328
15



中外新聞外篇卷之十五

慶應四年五月

○徳川家臣歎願書

恐悚恐懼昧死奉_レ上_レ以_レ抑寡君□□此度奉蒙

朝譴六師を以て征討_ニ至_リ以_テ段私共深く奉_レ恐入_レ晝夜哀

泣_ク以_テ寛宥_ノ由_ニ處_ニ置_テ相願居_ル以_テ去_リ四月中五箇條の趣_ニ沙汰

有_レ之寡君水戸表へ退居_ニ謹慎_ニ在_リ城地_ニ引渡_テ上_レ軍艦銃砲

等差出_シ孰_モも謹_テ

朝旨を奉_レ以_テ付寡君恭順_ニ念_ヲ奉_ルの段_ニ諒察_ニ成_テ下_ニ寛

大_ニ由_ニ處_ニ置_テ可_シ仰_テ出_テ我_ノ趣_ニ拜承_テ奉_ル全_ク寡君尊_ニ王_ノ



至誠相貫き以て後と私共一同徹骨銘肝難有仕合奉存此處置
の次第早速に仰出も可有之と一日千秋の想に仰望存
以て今又此沙汰不に仰出上へ依頼可仕主人を失ひ下へ一
身を措く又所ある後ら又日月を送り以て不本意至極にて
憤悶の餘り心得違ひて追々脱走仕以者も有之尚以て恐入
奉り以て田安中納言も深く心配仕以後又此座に得ても
何ふも教方の臣民一旦主家の傾覆又至り此所置の次第
疑惑仕以念慮氷解難仕彼を論し以得此又興り實以て不
得止候も此程に仰出以昔も有之以得共畢竟此處置不に
仰出以内へ追々近国等へ散走仕潰裂四出の勢に相成寡君

恭順の素志も相背き現在 皇國の生民永く塗炭の災に
相か

朝政の維新の初めは當り雍々熙々を化變して至極至酷の
世体と相成り天地覆育の 聖意も不相愜候と奉恐
入に既又過日田安中納言へ江府鎮撫の委任に仰付以て共
前文の次第に付下恐寛大の由處置に仰出主家顯然相立
此沙汰に仰付以て追々鎮定の方畧も行届する委就て
一先城地の候に田安中納言へ此預に成下寡君候に江戸表
へ還任謹慎仕居に松に仰渡奉願に右に最早前件恭順の
実効相立

朝廷に對し二心無之段明白の後、有之且城地の後、一家の私を所と無之國を護り民を綏むる要害は座に付莫ハ大総督の明鑒を以て一時鎮定の為め、中納言へ預相願の後、座に寡君先頃上野山内、慎み所在に節ハ自然恭順の誠を以て衆心を鎮壓仕へども、一旦江戸を離れ、いへば忽ち激くと異論相起り、鼎沸仕是寡君の去留に依り人心の動靜相變り、證跡不明は座に右願の通に仰付、一一同弥、此寛典の處置は可相成證を相信し衆心の疑惑も相解、蓋以て朝廷の仁慈を永く難有奉存令せ、一て靜謐に趨き、いそ、顯然の儀と奉存、私共痛心の餘り、幾重にも奉歎願、此段

事情、洞察臣子の心中、取取執成、仰上、下置、以、奉、願、度、敢て、斧、鉞、の、誅、を、冒し、奉り、上、に、恐、惶、頓、首、

徳川家
役人共

大総督
参謀衆

○ 閏四月四日 朝廷小布告

此度 御親征海軍 天覽、為遊時機、依り東海道へ大旆を、為進、思食、は、大、總、督、官、より、關、東、の、形、勢、言、上、の、趣、も、有、之、暫、浪、華、は、滯、在、は、為、遊、に、然、る、處、此、度、徳、川、□、□、恭、順、

謝罪仰 天裁に付て、不可赦の大罪嚴譴至當に、其
祖先の勲勞不_レ為捨非常至仁の 睿慮を以寛典の_レ處置
に仰出に依之兼て、_レ布令の通速に 還幸_レ為在□□伏罪
江戸城平定の廉相立に_レ所を以
御先灵へ_レ為告以思食_レ付 山陵に冬拜_レ仰出に_レ去會
津其外殘黨の者當_レ所_レ屯在暴威を張抗官軍に趣相関に此
後の動靜に依り直_レに 親征を_レ可_レ為遊以る公卿列藩
益勉勵敵愾の氣不相弛松屹度可相心得に且又追々内外の
大勢_レ為 知食海陸軍の_レ作興より列藩の_レ指揮海外各
国の_レ扱等其當を_レ為得いと否といは_レ興廢の岐る_レ所殊_レ

地勢の利不利ハ關係の尤大ある儀に付、_レ弥以 勵精 以
誠誓_レに_レ為基已後屢浪華_レ行幸官代を_レ為置万機 以親
裁内外の大勢に_レ紗馭_レに_レ為遊に 睿慮の旨に_レ仰出に_レ付上
下厚く奉体_レ各々其分を可_レ尽_レに沙汰に事

○大多喜侯へ朝廷より沙汰の趣

先般□□叛逆_レ候後、其密謀を資成に_レ殺不可許罪状に
付追て_レ處置可有之に_レ一とも一先佐倉藩へ_レ預且左の兩
件に_レ仰付に速_レに拜承可仕に事

一條

本城掃除致し且領知圖書武器類等悉く皆召上り事

二條

豊前同意不軌の儀に付従事ハ族ハ當地於寺院謹慎の事

但し其餘子弟と雖も無罪の輩ハ更ニ不及関係ハ也
右兩條ハ仰付ハ依之明十二日辰刻を限り遵奉可有之ハ於
違背ハ齊懲の典刑可相正ハ事

辰四月十一日

東海道鎮撫

副総督

○題しらん

とみ人しらん

頼みなきけられ小島のおののちれよかろくまを

○閏四月七日奥及小名濱山代官觸書

今般會津悔悟し天朝へ降伏謝罪歎願し同家家来

梶原平馬外四五人米澤仙臺兩藩に寄鎮撫總督府へ歎願書差

出に付近日會津人数出張の者と追々若松へ引上げに儀

よ併仙臺其外人数ハ

勅命し出張に儀に付京都より何等の沙汰有之に迄ハ

人数引上げ不相成白川其外近地へ諒詰り右沙汰相待に

儀に付戦争ハ無之に乃銘く安堵し平常の通り家業相

○可事

三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

閏四月の末つゝ

柳河の春蔭

あをれ世をうの花とくく日數つてきみとくまをれぬ空うれ

○

戦地遣興

作者不詳

義兵所向賊皆僵幾片旗散路傍鞆鼓聲中停馬處河流渺々
月蒼々

子規

無名氏

怨誰望帝萬斯年地勢南飛自北邊志起樊籠非飲物一聲鳴度
海東天

